

飼料用とうもろこしの倒伏を防ぐために

近年の倒伏被害とサイレージ調製への影響

近年、北海道にも台風が上陸し、飼料用とうもろこしの倒伏被害が道内各地で問題になっています。倒伏すると、収量のロスになるばかりか、収穫時に原料草に土砂が混入しやすくなり、サイレージ発酵品質が低下します。

飼料価格高騰の情勢を考えると、倒伏対策を行い、自給飼料を安定的に確保することが益々重要になります。



写真1 倒伏した飼料用とうもろこし

栽植本数試験の結果 (本別町)

昨年、本別町で行った「飼料用とうもろこしの栽植本数と倒伏への強さ」を調べた試験の結果を紹介します。93日タイプの品種を使い、10a当たり約8,000(8,418^{*1})本区、約7,000(7,391^{*1})本区、約6,000(5,942^{*1})本区を設置し、収量や倒伏への強さを調べました。

(R3年5月8日は種、9月17日調査) (※1: ()内は実際の株立て本数を示します。)

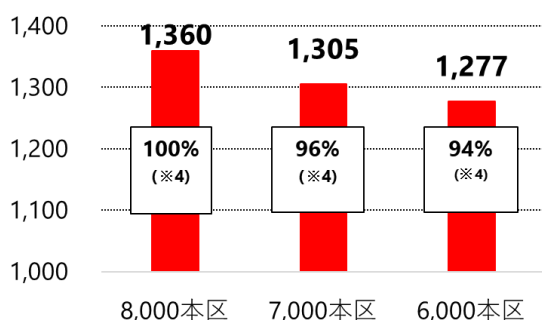


図1 栽植本数とTDN収量 (kg/10a)

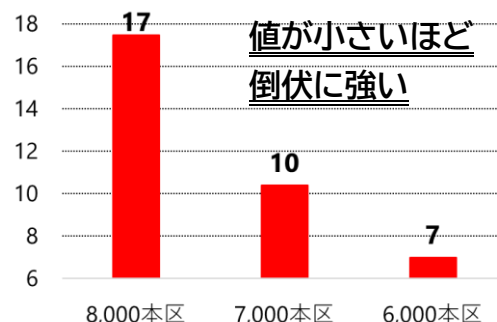


図2 栽植本数とHPR値 (※5)

(※4: 8,000本区のTDN収量を100%としたときの割合を表しています)

(※5: 稈長・着穂高・引き倒し抵抗値(N)から計算される数値で、**値が小さいほど倒伏に強い**ことを示しています)

TDN収量(実際に牛の口へ入り栄養となる収量)を比べると、8,000本区を100%として、7,000本区で**96%**、6,000本区で**94%**となりました。

また、倒伏には、**6,000本 > 7,000本 > 8,000本**の順で強くなりました。

これらのことから、栽植本数を大幅に減らしても、TDN収量はそれほど減収せず、かつ倒伏には強くなることがわかりました。

コストを抑えて、良質な自給飼料を確保しましょう！

(文責: 十勝農業改良普及センター十勝東北部支所 ☎: 0156-25-4326)